

高津時代の本

野口幹夫



松虫中学の時までは、むつかしい本は無縁の存在だった。新聞部の顧問の世古先生から卒業祝いにと、岩波文庫の「善の研究」をいただいた。読みかけたが歯が立たなかった。70歳になるまで、この本は大切に眠っていた。

高津に入ると待ったなしに本が押し寄せた。1年の夏休みだったか、池田先生の宿題に「平家物語」が課せられて、2学期のはじめレポートを出した。「重荷を背負った英雄たち」これが自分が読後感を書いた始まりであった。

数学の松田先生から数学の授業が終わったとき、黒板の端に縦書きで書かれたのが「神々の愛でし人々」これを読むよう紹介された。数学者ガロアの人生を書いた本だった。同じように津川先生からだったと思うが、シェンケヴィチの『クォ・ヴァディス』を推奨され読んだ。

級友だった安保公博君が図書館報か何かに「埋もれた金印」の書評を投稿しているのを発見。まぶしい存在としての岩波新書を知り、また隣の級友に驚きの敬意を抱いたことを覚えている。

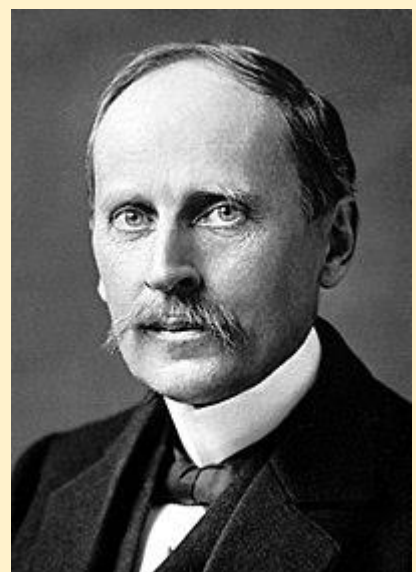
そして高津時代に出会った忘れがたい本が「ジャンクリストフ」であった。確か2年生の時の国語の教科書に載っていたのだ。第6章「アントアネット」が抜き出されていたのでは

なかったか。その後昭和 27 年から 28 年に発行された新潮社の世界文学全集の 3 冊本を買って読んだ。それに引きずられるようにフランス文学の同類「チボ一家の人々」も読んだ。

ついでながらフランス文化といえば、高津の国語の先生加藤栄一先生から、後年あるとき「ベルグソンを読みたまえ 特に 4 巻と 6 巻」と言われたのがきっかけで。ベルグソン全集を御茶ノ水の古本街で求め、10 年かけて読んだ。ありがたかった。人生の宝物をいただいた。彼の哲学の延長線上に今の自分がある。

ところで、私の読書歴のスタート的記念碑である「ジャンクリストフ」は、今も本棚の上のほうでほこりをかぶって存在していた。しかしなぜか内容を全く思い出せないのだ。トルストイの「戦争と平和」ドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」トーマス・マンの「魔の山」中里介山「大菩薩峠」などなど人生で出会ったこれらの大作は、どれもあらすじや印象に残るシーンが思いだせる。しかし「ジャンクリストフ」は何も思い出せないのだ。それは特別なことだ。何か理由があるかもしれないと思い、埃の中で眠っている 3 冊を取り出した。10 月 5 日のことだ。そして格闘 10 日間やっと読み終えた。その読後感だ。

主人公ジャンクリストフはドイツの地方王国で生まれた、音楽家の祖父と父のもとで、天才音楽家として育てられた。モーツァルトと同じだ、しかし性質は粗暴だ、礼儀も知らず、同時代のだれの作品も攻撃してやまない。女遊びもする。長



(ロマンロラン)

続きはしない。王様とも喧嘩して宮廷を追い出される。(ここもモーツァルトと同じだが) さらに田舎の祭りで兵士たちと乱闘でけがをさせ、ドイツにすることができなくなり、パリにでる。

ここでフランスの孤児姉弟アントアネットとオリヴィエと出会い、友情を結ぶ。国語の教科書に出ていた部分だ。オリヴィエは詩人だ。彼との共作「ダビデ」が大評判を呼び、彼の音楽の代表作となり、また彼の音楽家の地位を確立する。彼はドイツ フランス スイス イタリアを自由に動ける身となり活躍を続ける。彼は多くの女性に愛されたが、望んでいた家庭も築くことなく、孤独な中に死を迎える。作家ロマンロランは、ジャンに平穏な死の時も与えなかった。「…われは戦い苦しみさ迷い創造した。我をして汝のやさしき腕の中に息をつかせたまえ。他日われは新たな戦いのために蘇るであろう」 生を讃えん哉！死を讃えん哉！ で終わる。

今回改めて、読むほどに感じたのは共感ではなかった。あまりの粗暴に呆れ、ついていくのが嫌になった。彼が生きていたドイツパリーローマつまり欧州の中心は、歴史が活発に動いていた時だったはずだが、この小説にはその時代を特定できるヒントが見当たらないのだ。各国でナショナリズムの動きも書かれ、戦争への危険も感じさせるので、普仏戦争の前かあるいは第1次大戦の前かとも思えるが、彼のように社会改革運動にも敏感だったにもかかわらずそれがはっきりしないのも不満だった。

また音楽家としてのジャンクリストフは、幼年の天童の時代はモーツァルト、気むつかしい奔放なところはベートーベンに似ているが、ある音楽書にはジャンクリストフはヘンデル

をモデルにしていると書いてあった。それには同意しがたい。なぜならヘンデルの成功の都市はイギリスだったが、この小説ではイギリスは出てこないからだ。音楽を文学でつまり言葉で表現することの本質的な違和感すら感じるのだ。

しかし高校時代に抱いた感想は全く違っていた。感動の極みであった。幸い、どんな気持ちで読んだかがわかる書き込みがあった。2回読んだようだ。

「1953年5月5日 無限の感激を味わいつつ読み終わる。彼はなした 「自己を所有のための精神の広大な努力」 を」

「1957年9月2日 5年前とは比較にならないしみじみとした近親感と 励ましを感じて読んだ。今の自分になくてはならない生活への牙を再び作ってくれた」

これでわかった。当時は自分をジャンクリストフと同化して読んでいたのだ。まだ人生を歩み始めたばかり、前途をどう想像しようとする自由だった。ジャンクリストフの強い生き方に自分をなぞらせるのも自由だった。当時の感想文はそれを示している。

今はそういう読み方はできない。自分の後にもう消すことのできない人生がある。自分になぞらえない別の人間像がある。しかもそれはノーベル賞を得た作品の人間像である。つまり今は客観的に突き放して読むことしかできない。その差だった。

「ジャンクリストフ」は青春の書であった。